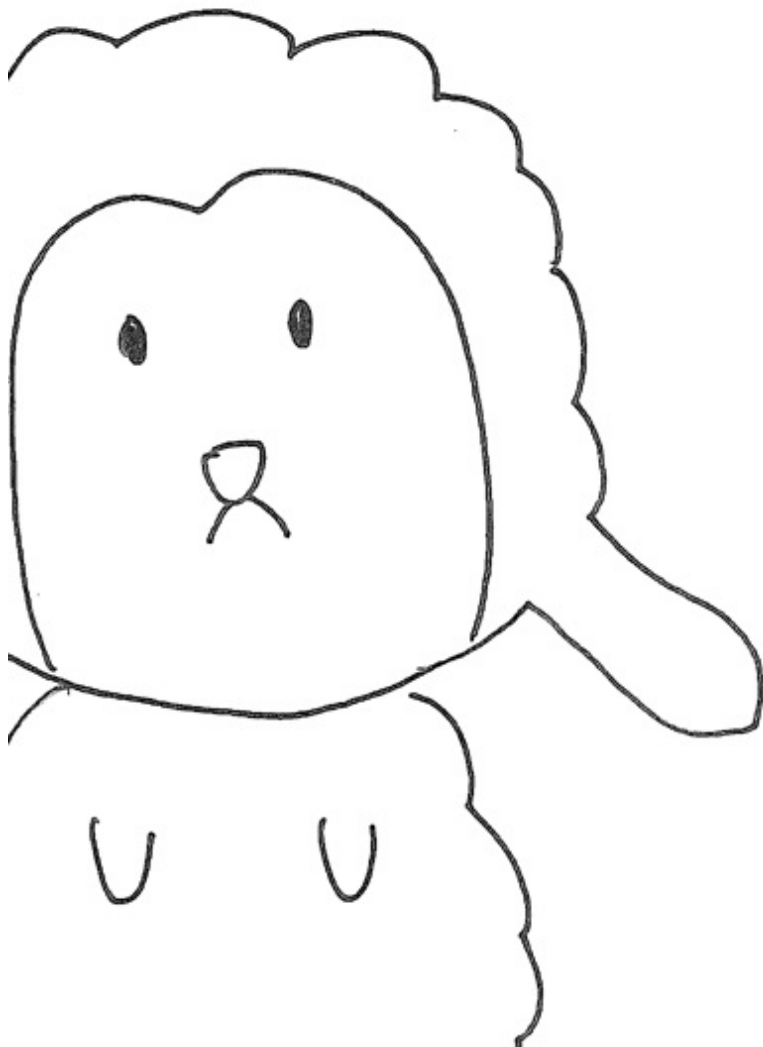




となりのモモンガ



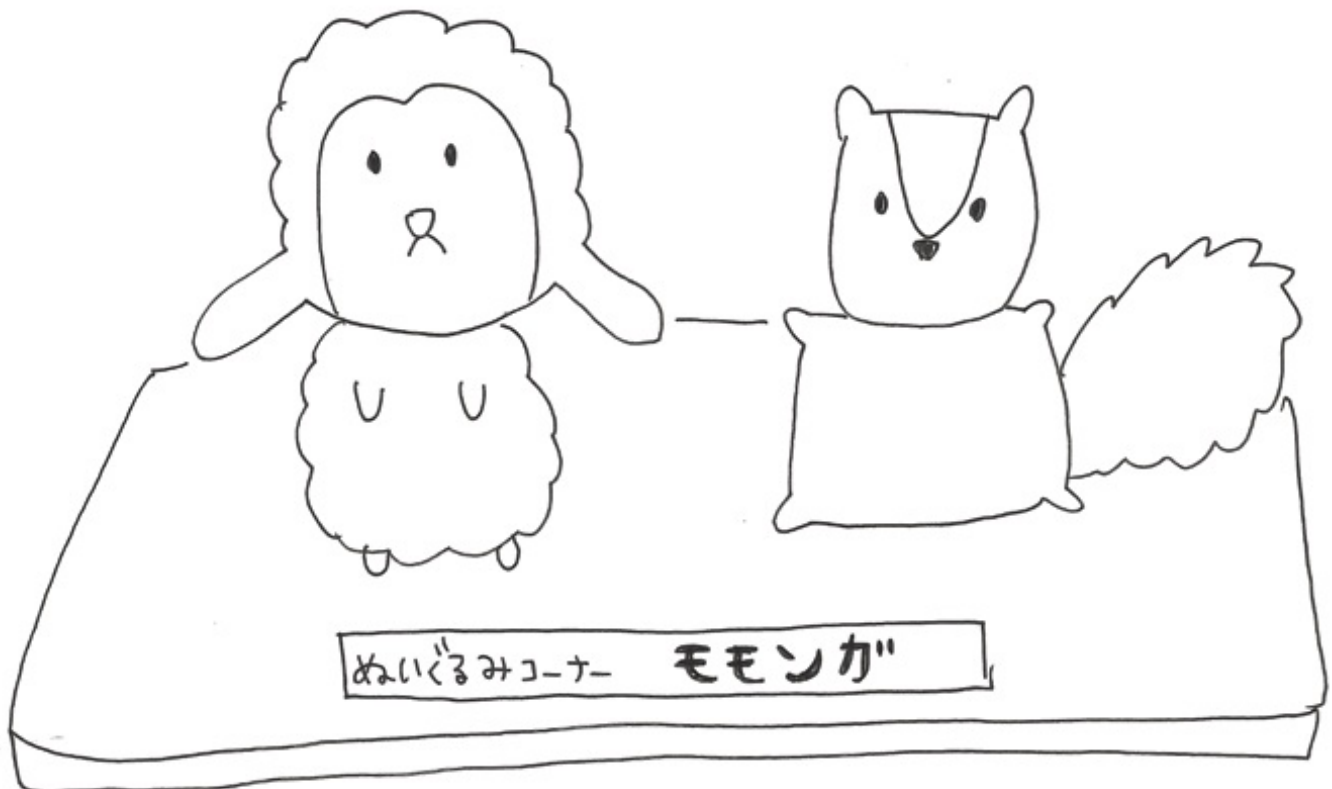
ぶん・アヤテ
え・よしの

ぼくは、たなに ならべられていた。
そう、4、5年まえから。

だれも さわって くれなかったんだ。
こいわい のうじょう の おみやげやさんで。

くる日も くる日も、ぼくは たなに ならべられていた。
そのうち、となりの モモンガ が 言った。

「ぼくら、いつまで ここに いるんだろうなあ。
こんなことじゃ、おきものになっちゃうよ。
そんな人生、ぼくは いやだね。」



つぎの日、となりの モモンガは、
ちょっと としをとった
おじいさん と おばあさんに、買われて行った。

ぼくは、ひとりぼっち に なった。



ぬいぐるみコーナー

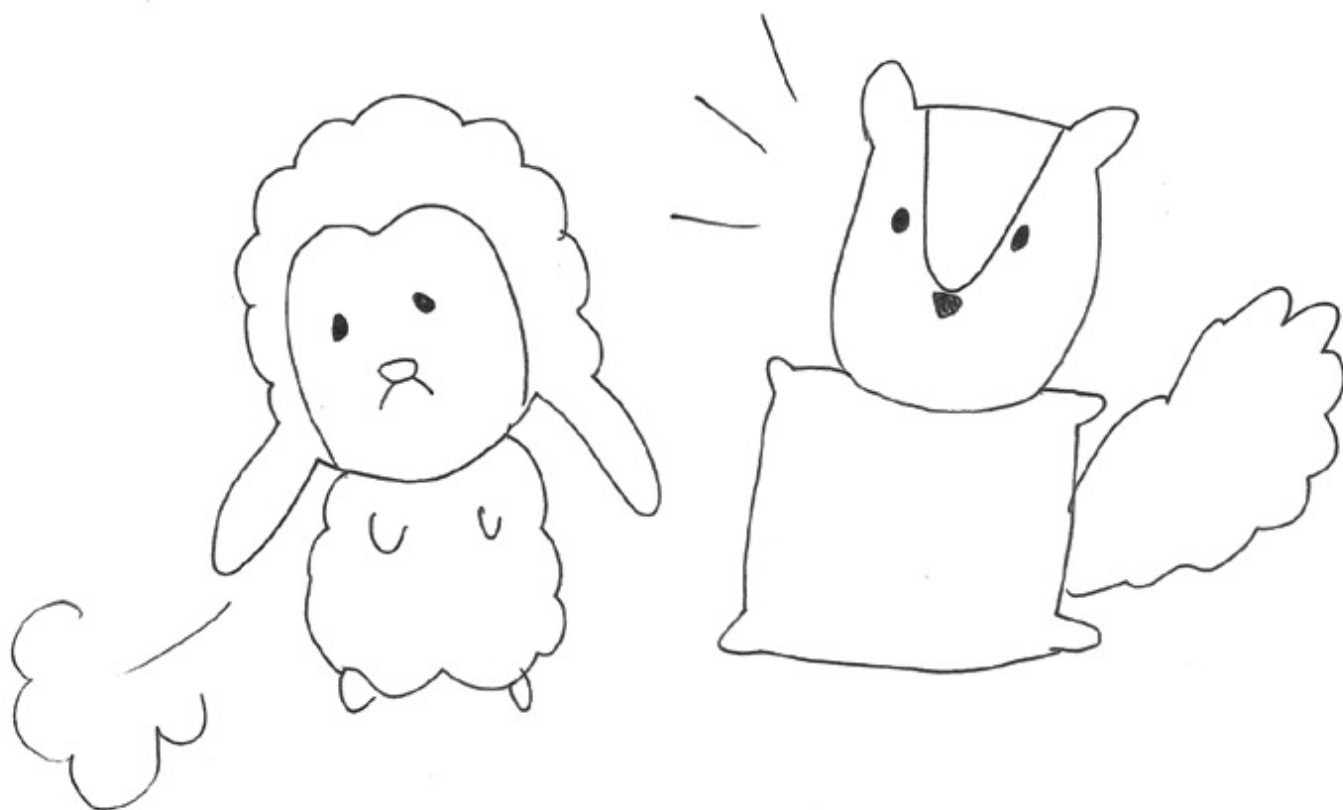
そのうち、またぼくの となりには、
あたらしい モモンガ が きた。

モモンガ は 言った。

「そんな じみな かおしてちゃ、
いつまで たっても かわれないぜ。
おれみたいに とべなきゃな。」

そう言って、あたらしい モモンガ は、
ばさりと とぶのであった。

ぼくは おもった。
そんなこと言っても、ぼくは モモンガ じゃない。
空を とぶことなんか、できっこないんだ。



つぎの日、あたらしい モモンガ も、
おじさん と おばさん に 買われて行った。

またぼくは、ひとりぼっち に なった。

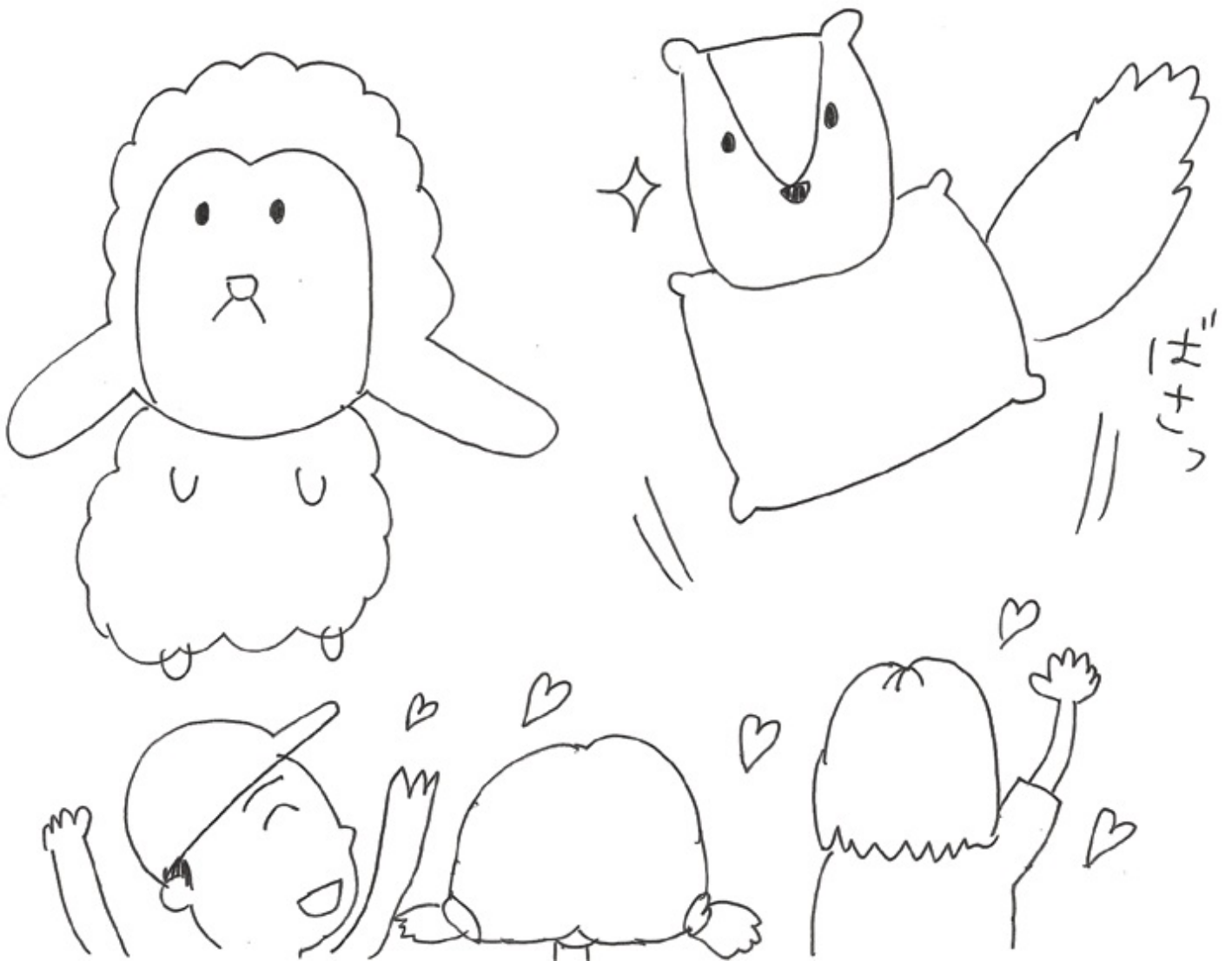
みじめだった。



ぼくは、ひつじのぬいぐるみ。
モモンガじゃない。

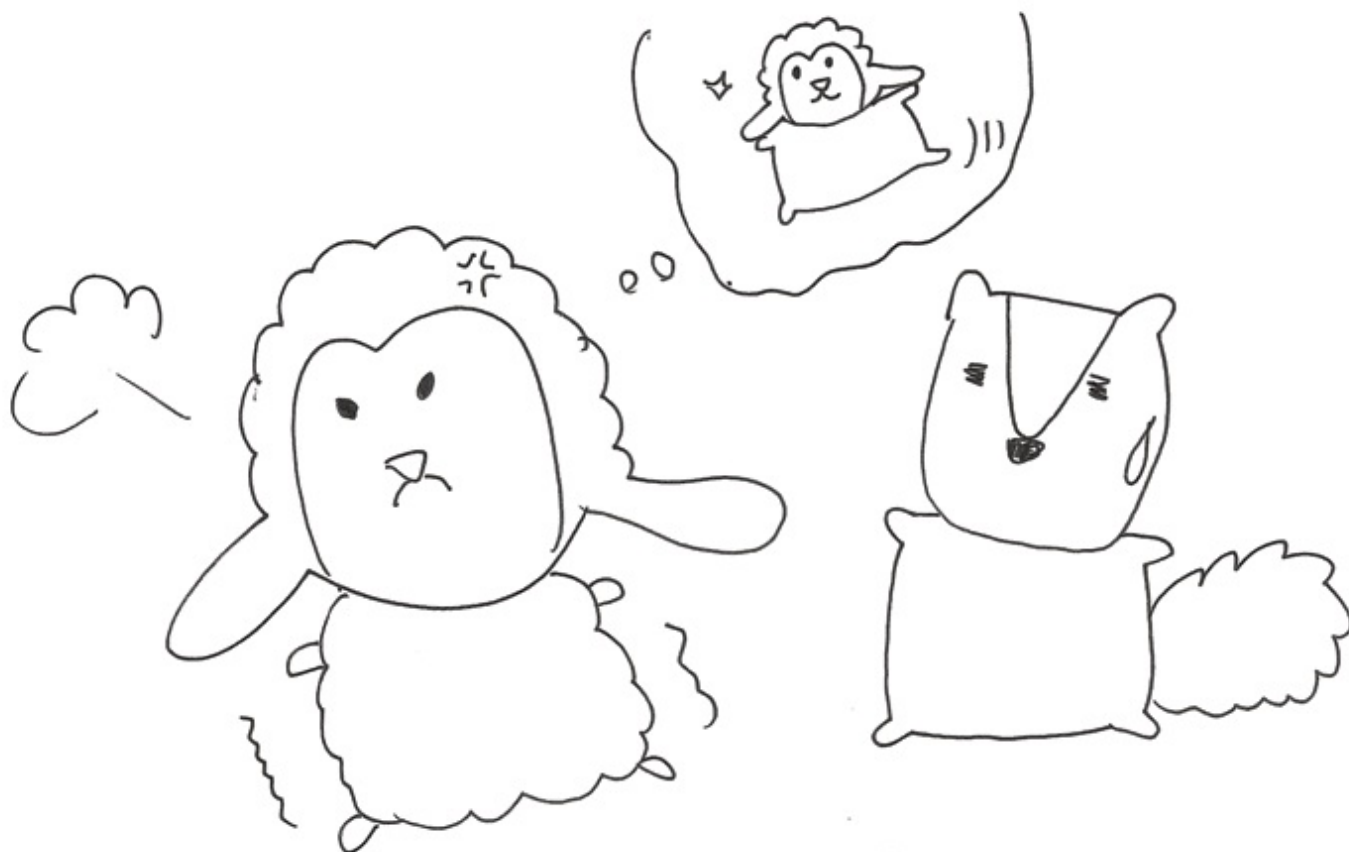
なのに、なぜか、4、5年まえからずっと、
モモンガのたなにおかれていた。

となりのモモンガたちは、
ばさりばさり と とんでは、
つぎつぎと 買われて行った。



ときには ぼくも、モモンガの まねをして、
ばさりと とぼうと したもんだ。

でも、あんのじょう、
けむくじゃらな ぼくには、
とぶことなんて できなかった。



そんな ある日、
わかい だんじょの カップルが、
ぼくを 手に とった。

「なにこれ、モモンガなの??」

ぼくは、モモンガの ふりをして、
ばさり と とぼうとした。

でも、やっぱり あんのじょう、
ちっとも とべなかった。



「なに、このぬいぐるみ、
モモンガじゃないじゃん！！」

ぼくは目をつぶった。
やっぱりだめか。

そのとき、女の子が言った。

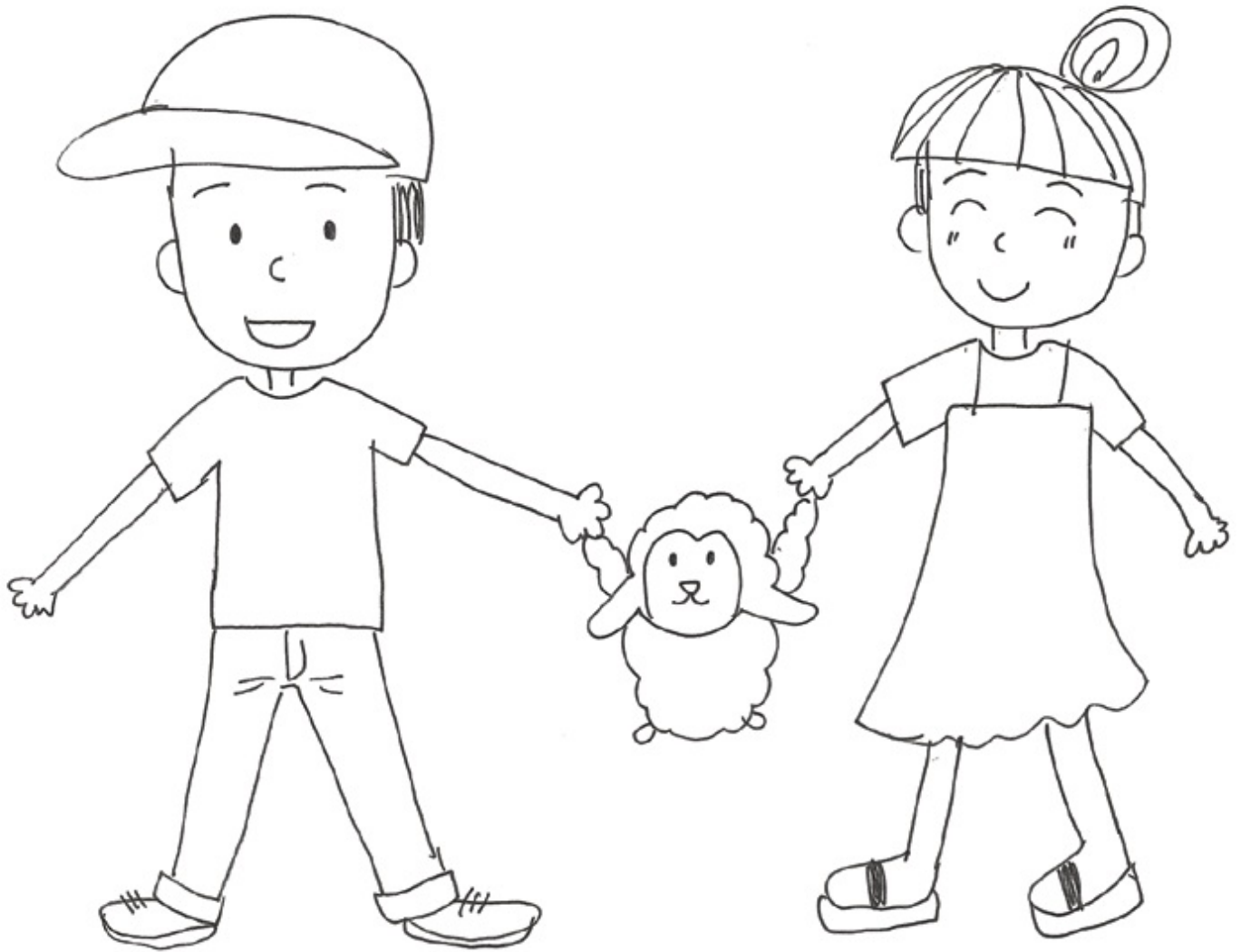
「でも、かわいい！！ふかふかしてる。ひつじみたい！！」



「ねえ、これ買って 行こうよ。」

「うん、そうだね。かわいい ひつじ だね。
買って かえろうか！」

ぼくは、生まれて はじめて、買われることになった。



そうか、モモンガの ふりをする ひつよう、なかったんだ。
さいしょから、ひつじ らしくしておけば、よかったんだ。

ひつじの ぼくは、
はじめて そのとき、きづいたんだ。

ぼくは、ひつじ でしか、
ないんだって ことに。



おわり